

刊行事業が歴史史料の掘り起こし・蓄積において果たしてきた役割はあまりに大きく、それらの保存施設・体制をどう確立するのかは、各自治体の枠を超えた共通の課題となっているのである。

本書はこのような問題点を、先に紹介したような、各資料の書影を1枚あるいは複数枚大きく紹介した資料の全ページの撮影データのDVD収録という形で克服しており、今後の自治体史の史料「保存」や文書・蔵書目録のあり方の一例として、注目すべき目録でといえよう。

もちろん、「DVDの耐用年数は紙に比べると必ずしも長くはないのではないか?」、「ネット上・クラウドの方が適切ではないか?」、「公文書館の充実が先決ではないか?」、「公的機関による史料

の収集・蓄積は、どこまでが対象なのか?」、「近世やそれ以前は対象とすべきか?」、「医療文書は対象となり得るのか?」などといった、多数の論点があることは承知しているが、ここで議論するには手に余るので稿を改めたい。

《参考》

児玉幸多ほか『市町村史等刊行の実務』柏書房, 1975年
小松芳郎『市史編纂から文書館へ』岩田書院, 2000年
文書館問題研究会横浜開港資料館『歴史資料の保存と公開』岩田書院, 2003年

(松村 紀明)

[只見町教育委員会, 〒968-0433 福島県南会津郡只見町大字只見字町下2591-30, TEL. 0241(82)5320, 2016年3月, A4判, 293頁, 非売品]

西迫大祐 著

『感染症と法の社会史——病がつくる社会——』

フレデリック・F・カートライト著(倉俣トーマス旭/小林武夫訳)『歴史を変えた病』にあるように病は人類の歴史の多くにかかわってきた。「病がつくる社会」との副題がつけられた西迫大祐氏の一書に私見を加えて紹介したい。本書には『公衆衛生・統計・統治』の帯がつけられ次の構成よりなる。本文の章立ては次のようになっており期待を以て読み進めた。

序章 ミアズマと感染

第一部 十八世紀における感染症と法

第一章 マルセイユのペスト——ヨーロッパ最後のペスト流行とポリス

- 一 マルセイユにおけるペストの惨禍
- 二 マルセイユ市への規制
- 三 イギリスとマルセイユのペスト流行

第二章 悪臭と密集——十八世紀における都市と感染について

- 一 悪臭と密集
- 二 埋葬の問題
- 三 換気と移転

第三章 腐敗と衛生——ルソーとカバニス

- 一 十八世紀の都市における精神の腐敗の問題
- 二 ルソーにおける身体と精神の衛生学
- 三 カバニスにおける身体と精神

第四章 生命の確率——予防接種の問題について

- 一 種痘接種に関する法学=医学的議論
- 二 種痘接種に関する数学的議論
- 三 種痘接種に関する道徳的議論

第二部 十九世紀における感染症と法

第五章 感染症の衛生的統治——一八三二年のコレラ

- 一 一八三二年, コレラ
- 二 コレラと行政
- 三 コレラの後で
- 四 人口と感染症

第六章 手本の感染——公衆衛生と精神感染

- 一 エスキロールと自殺の感染
- 二 ヴィレルメと飲酒癖の感染

第七章 一八四九年のコレラと法

第八章 人口と連帯——一九〇二年の公衆衛生法

- 一 一八七八年——万博・国際衛生会議・細菌

- 二 衛生と自由の対立
- 三 公衆衛生法
- 四 結核と連帯

本書ではフランス十八・十九世紀の流行病・感染症に対する社会を法と統計から統治する公衆衛生を論じている。二十世紀のインフルエンザ以前の主にペスト、コレラの大流行に対する国家と地域の統治を詳述している。1902年のフランス公衆衛生法成立に至るまでを、政治家・行政官・哲学者・思想家・作家・統計学者・医学者・軍人、そして公文書を含めてまとめた力作である。パリを中心としたフランス分析として、この当時のパリが国際都市として変化する中で、地方、海外からの労働者の流入、国際的な通商・流通の増加に伴う感染症に対する恐怖・危機感が突出して、公衆衛生学が確立され、フランス公衆衛生学は世界の前衛となったとしている。

上記本文に先立ち「はじめに」に著者の本書の主題に係る本質的な問題意識が認められるので紹介したい。十八世紀までのヨーロッパ社会の流行病に対する理解はミアズマ説と感染説が併存し、そのため逃避と追放による対応であった。その後の都市生活化、法治国家の体裁が整う中で、隔離と遮断が行われるようになったとしている。それについて著者は『現在とは違い、なぜ感染がおこるかがはっきりと分からず、何らかの防衛策を講じなければならないという状況において、医学と道徳的感情が混合し、感染症が社会的な意味を持つようになり、それを予防するため法や規則が成立してゆくプロセスが、現在よりも明確に検討できると考えたからである』『医学や衛生学上の発見や変化によって、感染症の予防法は変化してきた。しかしながら、そのかわりには、恐怖や偏見や道徳的感情が寄り添ってきた』と述べる。

本書が出版されたのは2018年8月であり、COVID-19の世界的パンデミックの予兆はないころである。高病原性鳥インフルエンザ、エボラ出血熱、SARS、MERS、新型インフルエンザなどの新興感染症への警告は世界的にされてはいたが、コロナウイルスの世界的なパンデミックが、世界

中の文化経済の中心都市のロックダウンや国境閉鎖、そして医療崩壊を目の当たりにすることを、多くの人には予想されていなかったと考える。1918年からのインフルエンザのパンデミックについてよく語られるようになってはいるが、医学の歴史を学んできたものにとり、その時代は第一次世界大戦の惨禍の中で起こった新興感染症と理解されていた。速水融の著書『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』によれば、世界の第一次世界大戦戦死者1000万人、インフルエンザによる死者2000万人から4500万人、日本内地で死者150万人とされる。そして驚くべきことに、2006年までに日本ではこのインフルエンザをタイトルとした一冊の著書もないと速水は述べている。

われわれは、今回のCOVID-19コロナウイルス禍がどのような歴史的な経過をとるのか、世界でも日本でも全くわからないと述べておいた方がよからう。ワクチンと治療薬に期待する論調が盛んであるが、それが世界的規模で可能となることはそれほど容易なことではないだろうと考えている。

本書の主題となっているのはフランスであり、その時代は十八世紀、十九世紀とそれ以前が中心となっており、インフルエンザの二十世紀は含まれていない。そのフランスは現在EUの中心国であるが、EUの連帯はCOVID-19対応では全く見えず、各国都市のロックダウンと国境封鎖ばかりが先行した。今回のパンデミックの前にBREXITをした英国は牛痘ワクチン生みの親であるジェンナーの故国である。ワクチンのヨーロッパ大陸、そして世界への拡がり人類に及ぼした福音は偉大である。しかし当時の英国内での一般的な受容もヨーロッパでの受け入れも、それほど容易でなかったことは疫学を学ぶ者にとってはよく理解されていることである。本書の第四章は種痘による予防接種の問題をフランスでは統計的、倫理的に、どのように批判・評価して受け入れていったかが大変によくわかる一章であり、いままでの一般的な種痘史を超える興味を持って読んだ。

しかし本書の終章となる結核の問題は十九世紀、公衆衛生の先進国であったフランスが結核の

高度の蔓延国であったことが広く認められていた。このことを、大森弘喜著の『フランス公衆衛生史』が環境衛生の面から活写していることを以前本雑誌で紹介したことがある。併せて読まれることをすすめたい。最後に「おわりに」の中で『われわれは、「衛生」を両義的なものとしてみなければならない。一方では「避けうる病」を減少させ、「命を救うものとしての衛生」であり、他方では、人間を「種」や「人口の一部」として認識し、それを管理し、改良しようとする「統治としての衛生である」』『感染症対策が二つの面を持つことを確認した。それは命を救うものである一方で、感染症の脅威を口実として人間の統治を可能にするものであった。したがって、われわれは「統治としての衛生」に陥ることなく、「避けうる病」を減少させるという難しい仕事を行わなければならない。そのためには、恐怖を目の前にしても、それが何のためであり、どのくらい必要

で、ほかに良い選択肢がないのかと、合理的に考える努力をしなければならないのである』と永遠の課題で結んでいる。

都市封鎖や国境を閉じることが突然に起こった今年、本書によればヨーロッパ社会の中で感染症による都市の封鎖は歴史的には少ないものでなかったことを理解できる。社会を律する法の問題を統計として現わす合理性の歴史を読んだときには、日本ではそれが身近なものでないと感じるのは評者だけではないと思う。本書を本学会誌にて紹介しておくことが必要と考え、著者の研究が二十世紀の結核そしてインフルエンザ以降についてもなされ発表されることを期待したい。

(渡部 幹夫)

[新曜社、〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-9, TEL. 03 (3264) 4973, 2018年8月, A5判, 387頁, 3,600円+税]

町泉寿郎 編

『講座 近代日本と漢学 第3巻 漢学と医学』

本書は、「漢学」から日本の近代化の特色や問題点を探ることを目的とした『講座近代日本と漢学』シリーズの第3巻で、漢学と医学の関係性に焦点を当てている。本書は以下の通り、12の論文と4つのコラムより成り立つ。①~⑯の番号は、評者が便宜的に付与した。

第I部 近世近代の「学び」

- ①第1章 近世日本社会における医学の「学び」(町泉寿郎)
- ②第2章 華岡流外科の普及と近代医学(梶谷光弘)
- ③第3章 江戸時代の経穴学にみる考証と折衷——小坂元祐と山崎宗運を事例に(加畑聡子)
- ④研究の窓 女訓書と医学知識啓蒙(ヤング, W・エヴァン)

第II部 西洋医学知識の普及

- ⑤第1章 18世紀から19世紀のヨーロッパにおける医学の変革、日本との関わり(坂井建雄)

- ⑥第2章 舶載医学蘭書小考(吉田忠)

- ⑦第3章 ベンジャミン・ホブソン著『全體新論』の持つ意味(中村聡)

- ⑧研究の窓 福沢諭吉の科学啓蒙(武田時昌)

第III部 医学医療文化史

- ⑨第1章 江戸時代の和算塾の様相(佐藤賢一)

- ⑩第2章 医者と漢詩文——江戸後期から明治期を中心に(合山林太郎)

- ⑪第3章 近世後期における地方医家の学問修業——吉益塾に学んだ人々から(清水信子)

- ⑫研究の窓 清医と幕府医官の筆談について——清医胡兆新『問答』『筆語』(郭秀梅)

第IV部 医学医療制度

- ⑬第1章 宗伯と漢方存続運動(渡辺浩二)

- ⑭第2章 医学校の近代化——岡山藩医学館